

やつとと言うべきか、意外に早くと言うべきか、「まえがき」にたどりついた。

議員活動10年目の頃、一つの区切りに活動や思いを記録としてまとめたと思っていたが、手をつけられずに、気がついたら二期目最後の年になっていた。

やっぱり何とかまとめたという気持ちに火がついたのは、昨年11月に今野東さん（当時は参議院議員）が出版した『子どもたちに明るい未来を手渡したい』を手にとったことだった。こんなに素直に思っていることを書いて、それを読んでもらえるのは素敵だな、と思ったからだ。

それで本を出すことを決め、書き始めた最中に、とんでもないことになった。お手本の今野東さんが4月24日未明、突発性間質性肺炎という難病で、入院して3週間あまりで突然亡くなったのだ。私は選挙の関係で全国を歩いていたので葬儀にも駆けつけることができなかったが、翌25日のホームページに「謹んで哀悼の意を表します」と以下のように書いた。

大切な人を失ってしまいました。あまりに突然のことで、信じられません。

リベラルの会、戦後補償議連をはじめ平和と人権を求める活動で大切な先輩で同志でもあった今野東さんが、4月24日午前0時32分急逝されました。昨年末、今野さんの人となり、志や思いが一杯詰まった著書が出版されています。2010年7月にベルリン、同年12月にソウルへ戦後補償を学ぶ旅にご一緒した時のことも書かれています。

悔しくなりません。

かつてない憲法の危機を前に急逝された無念をしつかり抱きとめて、今野さんの分も平和と人権確立のために闘うことを誓います。一人でも多くの方が今野さんの思いを受け止めてくださいますよう、この本を紹介します。

こう書いた隣に、私は今野さんの本の表紙を置いた。葬儀に参加した人に聞くと、仙台東一番丁教会での葬儀で、牧師さんはその本から「難民」関係など3か所を読み上げたのだという。「今野さん、やっぱり本を出版しておいて良かったね」

そして、私も本という塊に私のこれまでの人生、そして12年間の参議院議員としての活動を入れてみよう、と思った。

本書を読んでいただければ分かってもらえるが、私には特別なものは何も無い。福岡の田舎に生まれ、音楽の好きな学生として育った。でも、特別なものはなくても、私は両親の生き方を見、感じ、そして教員になってからは、子どもたちや同僚や友だちから多くの刺激を与えられた。誰にでもある、そしてひとりひとり違う「物語」の一つとしての「私の物語」が第1章である。

過去を振り返ってみると、私は戦前と戦後にまたがって教師をし、一家を支えてくれた私の母親の存在が以前にも増して大きくなったのを感じる。

第2章は12年間の参議院議員の活動をまとめた。一つの章で12年をまとめるというのは土台無理な話だから、私が議員になるときに決めた三つのこと、平和と戦後補償、男女共同参画、そして教育についてだけ書いた。教育は学校施設の耐震化促進、教育基本法改悪への闘い、インクルーシブ教育の推進、チルドレン・ファーストの4点にしばった。

私が何にこだわり続けたのか、そのことを読みとっていただければ幸いだ。

第3章は私がこの間、目が離せない、憧れの内田樹（たけ）さんをお願いをして、対談させていた。同感、同感、とうなずくことがとても多くて、楽しい時間だった。

内田さんのお父さんが教師で、戦後の価値観の転換期に教えるということを一生涯に考えていた姿を聞き、その姿が私の母親と重なって、緊張気味だった私の心が開放されていくのを

感じた。

そして最後の章は今年の5月20日の参議院の決算委員会での質問を収めた。議事録をそのまま載せるのはあまり格好の良いものではないことは承知しているが、私のエネルギーをこの質問に集約したので、我慢してお読みいただければ、現在進行形の神本みえ子の問題意識を知っていただけではないか、と思う。

この本には引用が多い。教員という職業柄、古いものが残っていたせいでもあるが、何より、過去を美化したり、あったことを現在の都合でなかったことにする、という度し難さを、私たちは抱えている。

だから、できるだけ当時のものをそのまま載せた。煩雑になってしまったことをお詫びするとともに、安倍首相や橋下大阪市長たちのような健忘症シンドローム、歴史改ざん者とは違う風にかきたいと思ったことを記しておきたい。

2013年6月3日

神本みえ子